F-6　（個人発表　6 月 12 日(土)16:30～16:55　N321 教室）

憑依における主体帰属をめぐって

ブラジルのカンドンブレを事例に

高橋慶介（一橋大学社会学研究科）

カンドンブレは奴隷制下に新大陸へもたらされた西アフリカのヨルバのオリシャ信仰に起源があり、植民地期ブラジルの首都であった北東部バイーア州サルヴァドール市を中心にブラジル各地で実践されている。カンドンブレに入信する者は、自らのオリシャが何であり、何を望んでいるのかを司祭から教わる。入信者は、そのオリシャの望みに対して「責務」を果たしてゆくことが求められる。責務には様々な制限、供物提供、儀礼執行などがある。オリシャのオリとは頭を意味し、オリシャとは頭の主だと語られるように、オリシャをめぐる実践は、「頭に関する事柄」である。入信儀礼であるフェイトゥーラは、「頭を作ること」であると説明される。こうして形成される入信者とオリシャとの関係は憑霊現象として現れ、憑依霊の祭礼は定期的に一般公開される。

憑依霊が憑依霊を受けるミディアムに憑依する場面において、行為の主語はミディアムではなく憑依霊であるとされる。杖をつく年老いた女性が軽やかに踊り、屈強な父親が子供のようにお菓子を頬張るのは、その行為主体がミディアム自身ではなく憑依霊だからである。しかし、憑依霊による語りや振る舞いを細かく観察すると、憑依霊による主語の混乱やミディアムと憑依霊の間の記憶の連続などが見受けられ、その主語がミディアムに帰属するかのような場面も多い。このような主体帰属の曖昧なあり方は、明確に境界づけられた西洋的自己とは異なると言える。

一方、そうした憑依霊の振る舞いに言及する場合は、憑依霊とミディアムの間で揺れ動く主体帰属の曖昧さの余地はない。そこでは憑依霊を主語として、もしくは、しばしば生じる偽りの憑依への批判ではミディアムを主語として、目の前の振る舞いが語られる。

ゆえに、憑依は振る舞いにおける主体帰属の曖昧さと、言説における主体帰属の明確さが同時に成立する実践であると言える。それは一見すると、主体帰属が曖昧な憑依の振る舞いという現実に対する、主体帰属が明確化された解釈行為として捉えることが可能かもしれない。

しかし、現実という全体性に対する解釈という部分性を前提にした認識では、憑依霊の現前をめぐるダイナミズムを捉え損ねる可能性がある。日常生活では人々は仕事をし、健康に生き、恋愛すると同時に、失業し、病気に苦しみ、浮気に悩む。こうした日常生活に、カンドンブレの司祭はオリシャの意志と関与を認め、相談者にオリシャへの責務の遂行を求める。ただし、オリシャや頭に関する事柄とそれ以外の領域は区別される。例えば、司祭が相談者に対して問題はオリシャに関する事柄ではなく、医学的なことだとして医者の診断を勧めることも珍しくない。一方、憑霊現象ではミディアムが自己の統合感覚を喪失し、完全ではなくとも他者に身体を委ねている感覚、つまり他律的な身体感覚を覚え、また突然、ミディアムの身体は憑依霊から解放され、自己感覚を回復する。

つまり、憑依霊は常に既に存在していたとして目に見えぬまま日常生活の部分へと関与しつつ、境界を交渉しながら日常生活の様々な局面に浸透してゆく。そしてミディアム自身にその頭を通して侵入することで憑依霊として現前し、彼（女）の身体そのものを占め、全てが憑依霊によって統べられたかと思うと、憑依霊は目の前から消え失せて、日常生活へと戻って行く。非前と現前、部分と全体を往来するこうした憑依霊の現前をめぐるダイナミズムを捉えるためには、全体性としての現実と部分としての解釈という硬直した認識の代わりに、そうしたダイナミズムを可能とする認識のあり方を探る必要がある。そのためには、曖昧な主体帰属という現実と明確な主体帰属というローカルな解釈を対立的に捉える認識そのものが、ローカルな認識の一つであることを踏まえる必要があるだろう。

【憑依、主体、オリシャ、カンドンブレ、ブラジル】